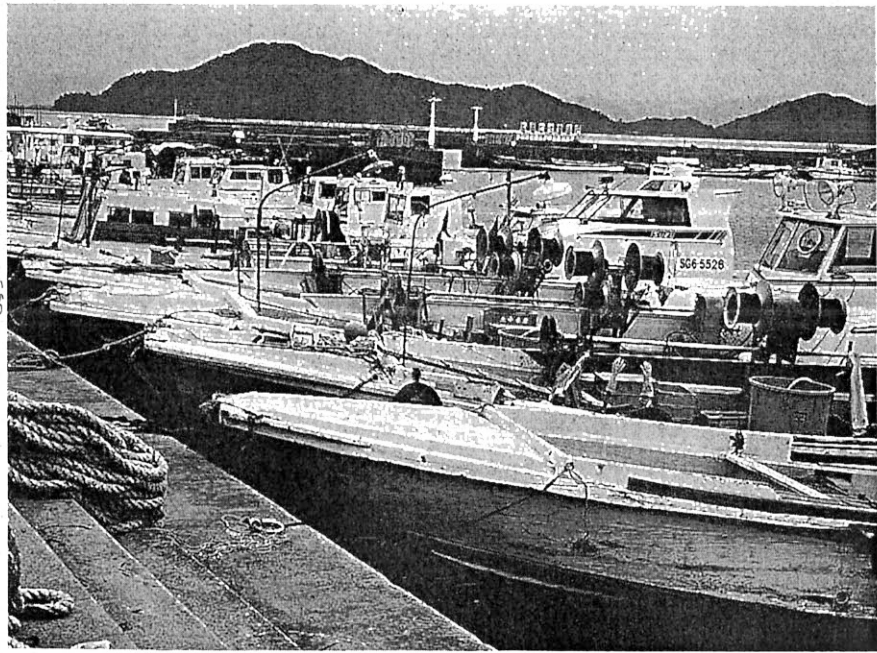


琵琶湖に棲む魚たち。その種類、数とも日本の湖の中では群を抜いています。これらの魚達は、人間が、琵琶湖の畔に暮らし始めて以来、現代に至るまで、大切な食糧資源として捕られてきました。広い琵琶湖にはさまざまな漁場があります。水深100メートルにおよぶ沖合。砂浜やヨシハラが広がる沿岸部。内湖。クレークと水田。琵琶湖に流れ込む河川。それぞれの漁場環境、そして季節に応じて魚たちは暮らしています。この魚たちをどうしたらうまく捕れるだろうか。湖国の人たちは、琵琶湖と魚の生態を観察し、考え、さまざまな漁法を駆使してきました。海（海水の海）から導入した漁法もあります。稲の栽培技術とともに東南アジアから伝来した漁法もあります。また、琵琶湖独特の漁法もあります。海の漁具に比べると規模は小さいです

が、その種類の多さは「漁法の博物館」と表現しても良いぐらいです。

琵琶湖の漁法には特徴があります。まず、魚種により漁期が定められています。産卵期などの季節は漁業を控えて、魚の繁殖を助けるためです。次に、捕って良い魚の大きさが、決められていることがあります。特に、フナズシの材料となるニゴロブナなど、中でも小さな魚は、網にかかっても放流する決まりになっています。次に、集魚灯を用いた漁法は禁止されています。海では、集魚灯を灯して魚を集めて一網打尽にする漁法が盛んですが、琵琶湖ではできません。次に、船の推進力を使った曳き網（トロール網）は、琵琶湖では使えま

## 多様な漁法



沖島漁港。湖国の人たちは琵琶湖と共生する漁を行っている

せん。琵琶湖の曳き網は、碇を打って船を固定し、網だけを引き寄せる方法が使われます。そして、琵琶湖の漁船には魚群探知機が積まれています。

せん。漁師さんは、長年の経験を基に魚を探だし、そしてこれを捕る漁業を行っているのです。琵琶湖の魚捕りの特徴。も

う、おわかりだと思えますが、魚を捕りすぎない漁法、魚の繁殖を妨げない漁業が、基本になっていることです。海と同じ方法の漁具・漁法も、琵琶湖風にアレンジして操漁しているのです。いくら琵琶湖が大きいといっても、海の漁法をそのまま琵琶湖で行ったら、琵琶湖の魚はあっという間に絶えてしまうでしょう。そうならないように、琵琶湖の再生産力を妨げない方法で、魚を捕る。「捕れるか捕れないかは魚次第。魚に聞いてくれ」。これが、長年培われてきた琵琶湖流の漁業なのです。

琵琶湖流の漁法の原点。自然が弱まったら人間も弱まってしまう。逆に、自然が元気なら人間も元気になる。自然の恵みを受け続けるためには、自然への配慮が欠かせない、というところにあるのではないのでしょうか。「自然と人間との持続的共生の思想」と言えるかもしれません。

ともあれ、しばらくの間、琵琶湖で繰り広げられた魚と人間の知恵比べをご紹介していきます。

## 捕りすぎないのが琵琶湖流